The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	汉语动相的多视点研究
Author(s)	夏, 天驕
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69640
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　夏　天驕　　）	
論文題名	汉语动相的多视点研究（中国語アスペクトの多視点的研究）

論文内容の要旨

本研究は、中国語におけるアスペクトに関する言語現象を対象に、機能と用法の視点から考察を行ったものである。アスペクト（aspect、または「相」）とは、Comrie 1976 の定義によれば「事象の時間的な内部構成に対する様々な見方」とされる。これまでの中国語のアスペクト研究において、“了”や“着”といったアスペクト標識に注目した研究は多く見られるが、文法標識以外のアスペクト現象については未だ十分な研究はなされていない。本研究では、文法標識以外の言語現象が如何にアスペクト義を表すのかについて、動詞の後ろの補語（第 3 章）、動詞の前の副詞（第 4 章）、形態のレベル（第 5 章）、動詞自身（第 6 章）に着目し、各々がどのような仕組みでアスペクト機能を実現したのかをケーススタディによって考察する。

本論文は全 7 章から成る。序章は全文の問題提起である。中国語の現象と日本語、英語との対照から、以下の 4 つの問題を提起した。①過去に起きた光放出事象の表現を中国語、日本語のコーパスでそれぞれ調べたところ、中国語の表現の殆どが「量」と共起するのに対し、日本語ではほぼ共起しない。②中国語の小説『阿 Q 正伝』において、已然義副詞は 31 回使用されているが、その日本語訳を見ると、直訳（「もう」または「すでに」）されたものは半数にも満たない。③日本語の擬音語は反復形が継続性、基本形（反復しない形）が瞬時性を表すという対応が見られるが、中国語では擬音語の基本形を継続的事象に用いるケースが見られる。④主体の現在の心理活動を表現するにあたって、心理動詞の種類によって共起できるアスペクト構文が異なる。以上の問題にはアスペクトが関わっていると考えられる。ここで本研究の目的を提示し、主な方法論を紹介する。

第 2 章では、これまでのアスペクトに関する代表的な理論を概観する。アスペクトについての研究は主に二つの流れが見られる。一つは Vendler 1957 より始まる「事象アスペクト」の研究、もう一つは Comrie 1976 より始まる「視点アスペクト」の研究である。前者は事象の時間的な内部構成に注目し、後者はその構成に対する見方に注目する。本章は両者の主な成果をまとめた上で、本研究が理論的基盤とする Croft 2012 のアスペクト体系を導入し、特に Croft の提唱した時間（time）と質（quality）を両軸とする、デカルト座標系によるアスペクトの表示法を詳しく紹介する。そして最後に、アスペクトの形式と意味のインターフェースを巡り、本研究の言語観を述べる。

第 3 章では、中国語の動量補語の多様な文法機能を考察する。中国語の動量補語は事象の数量、つまり回数の描写を主な機能とするほか、事象アスペクトの非限界（atelic）性、または動作主の感情や意志の表現機能をも有する。その文法化の過程は以下のようにまとめられる。まず結果性複合動詞の存在により、「質的有界」（限界性）という本来は動詞に含まれる意味が複合動詞の後項に移る。それによって「質的有界」を持たない事象、つまり「動作」(activity) と「瞬時動作」（semelfactive）は「量」の次元で有界性を実現する必要が生じる。これは中国語において動量補語の使用頻度が非常に高い原因であると考えられる。また、「動作」と「瞬時動作」の殆どは制御可能な事象であり、動量補語は多くの場合このような動詞と共起するため、元来動詞に含まれる主観性が共起する動量補語に移り、動量補語が主体の感情や意志を表せるようになる。つまり、動量補語の拡張機能である非限界性と主観性は、いずれも共起する動詞に由来すると考えられる。

第 4 章では、時間副詞“已経”の機能と用法を考察する。“已経”は完了相（perfect）副詞として、事象の発生を「変化」として捉え（construe）、その変化後の状態を指す機能を持つ。完了相を表す“已経”は主に以下の４つの用法を有する。まずは文の中に固定参照点がある場合である。その固定参照点には、ある確定的な時間や事象、観察者の視点、並列文や対照文における共通の統一的参照点などがある。一方、文の中に固定参照点がなく発話時点を参照している場合は、“已経”は起きた「変化」そのものを強調し、前後の状態が同一ではないことを示す。“已経”はアスペクト意味のほか、広義の因果関係を表す複文においては前提を表す機能を有する。また“已経”は主観性の標識でもあり、数量や形容詞などスケール構造を持つ語と共起する場合は、主観的「大」量を表現する機能を持つ。以上 4 つの用法は異なる意味レベルに関わるため、同時にこの４つの機能を実現することも可能である。

第 5 章では、「音が轟く」という意味の“轟隆”を例に、擬音語の形態的反復とアスペクトの関係を検証する。中国語の擬音語は多様な反復形態を持っており、“轟隆”で言えば ABB 形“轟隆隆”、AABB 形“轟轟隆隆”、ABAB 形“轟隆轟隆”のような形式が存在する。これらは事象の瞬時性、持続性といったアスペクトに関わり、ある一定の規則を有する。具体的には、ABAB 形、AABB 形は持続性、数量詞と結合した“AB 一声”の形式は瞬時性、ABB 形は瞬時的、持続的事象のどちらをも表すことができる。この三つの形式は全て擬音語の有界形式であり、事象のアスペクト性の実現（realization）に関わっている。一方裸の“AB”形は無界形式であるため、事象の時間性とは無関係であり、多くが語形成成分や連体修飾語といった時間性とはさほど関係のない位置に置かれる。

第 6 章では、中国語の動詞の語彙相プロトタイプを研究する。中国語、英語の動詞研究において、郭鋭 1993、Croft 2012 は共に動詞とアスペクト構文の共起、つまり動詞のアスペクト用法から事象に内在する時間構造を考察するという手法を提唱し、各々の研究を行っている。本研究では分類アルゴリズム OC を用いて郭鋭 1993 のデータの再分析を行い、郭の結論の妥当性を検証した。また概念辞書 FrameNet から選んだ 735 種の動詞と中国語の 15 種のアスペクト構文を対象に改めて分析を行った。本研究の分析によれば、動詞相のプロトタイプには、動作類、変化類、状態類という 3 つの主要類型と、動作-変化、動作-状態という 2 つの中間類型の、計 5 タイプがあることが分かった。変化と状態は互いにメトニミーの関係にあるため、この二つの中間類型は存在しない。

第 7 章では、本研究の成果をまとめた上で、今後の課題について述べる。今回扱った現象はアスペクトと関わる膨大な現象の中の極一部でしかないため、今後は対象範囲を拡大し、更に体系的な検証を行う必要がある。

论文摘要（中文）

本文研究了汉语中与“相”（aspect，或“动相”）有关的语言现象。所谓“相”，按照 Comrie（1976）的定义，是“对于事件内部时间性构成的观察方式”。在汉语学界，以往的动相研究往往集中在了体标记（如“了”“着”“过”等）上，但对于体标记之外与动相有关的现象的研究还很不充分。为此，本研究把对象设定为体标记之外的与“相”有关的语言现象，包括补语、副词、构词法、动词本身，主要以个案研究的方式，以形式与形式、形式与语义的相互作用为着眼点，从用法和功能这两个角度对相关语言现象进行考察。我们将研究的具体个案是：动量补语（第 3 章）、时间副词“已经”（第 4 章）和拟声词“轰隆”的构形重叠（第 5 章），第 6 章则将从宏观的角度探讨动词与表“相”句式的组合规律。

第 1 章是全文的绪论，我们通过与英语、日语的比较，用 4 个语言事实引出了本文的研究对象及目的。第 2 章是对现有的动相相关理论的评述，重点介绍了 Croft（2012）的动相分类及其理论依据，特别是文中提出的以时间和质为动相的两轴，用笛卡尔坐标系表示动相语义的图示方法。第 3 章我们对汉语动量补语的多样的语法功能进行了探索。动量补语除了能表达事件的数量之外，还能表达事件非终结的情状特征，或是行为主体的情感或意志。我们详细介绍了后两种功能，并解释了其发生语法化的原因。第 4 章考察了时间副词“已经”的用法和功能。“已经”作为一个表完成体的副词，具有将事件的发生当作一种变化来识解，且强调变化后的状态这一表时体功能。“已经”主要有外部参照、内部参照、表逻辑前提、表主观大量这 4 大用法，由于这 4 大用法处在不同的语义层面，因此由一个“已经”同时表现多种含义也是有可能的。第 5 章我们以“轰隆”为例，考察了汉语中拟声词的重叠与动相的关系。汉语中拟声词最主要的重叠形式为 ABB、ABAB 和 AABB 这 3 种形式，它们对事件时间性（瞬时/持续性）的表达遵循一定的规律。ABAB 和 AABB 可表持续性，与数量词结合的“AB 一声”形式表瞬时性，ABB 式则可兼表短时、长时事件，而光杆的“AB”形则与事件的时间性无关，它是拟声词的无界形式。第 6 章考察了汉语动词相的原型“过程结构”。在介绍了郭锐（1993）与 Croft（2012）的相关研究之后，我们使用自动分类算法 OC 对于汉语的 735 种动词与 15 种表“相”句式的共现进行了分析。按照我们的分析，动词的过程结构有以下 5 大原型：动作类、变化类、状态类这 3 大主类以及动作-变化过渡类型、动作-状态过渡类型这 2 大过渡类型，而变化与状态由于可互相转喻因此没有过渡类型。第 7 章是全文的总结与今后的展望。

様式7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　夏天驕　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	古川裕
	副 査　准教授	田畑智司
	副 査　教授	青野繁治
	副 査　講師	鈴木慎吾
	副 査　特任准教授	張恒悦

論文審査の結果の要旨

《汉语动相的多视点研究》（中国語アスペクトの多視点的研究）と題された本論文は、現代中国語で明示的な文法標識ではないものが表わすアスペクト現象の本質を解明しようとする意欲的な研究である。これまで中国語のアスペクトは動詞接尾辞の“了”“着”や方向補語“起来”“下去”など明示的な文法標識を巡る研究が主であったが、本論文はこれらの文法標識以外の言語現象が如何にアスペクト義を表すのかについて、動詞に後接する数量補語、動詞に先行する副詞、擬音擬態語の語構成、そして動詞自身の意味構造に着目してケーススタディを積み重ね、現代中国語におけるアスペクトの形式と意味のインターフェースを巡り、それぞれがどのような仕組みでアスペクト機能を実現するのかを現象横断的に考察したスケールの大きな研究である点が高く評価される。

本論文は、以下の全7章から構成されている。

第1章序論では、研究背景、問題提起、研究方法、研究目的と意義が述べられている。日本語及び英語との対照を通じて、中国語では動作行為の「量」、時間副詞が共にアスペクト機能を担うこと、擬音擬態語は単純基本形式と重畳反復形式でアスペクト機能が異なること、動詞自身の意味特徴がその動詞が出現できる構文を決定していることなどが述べられ、第3章以降の問題点が示されている。

第2章では、Vendler 1957より始まる「事象アスペクト」の研究、Comrie 1976より始まる「視点アスペクト」の研究を中心に、これまでのアスペクトに関する代表的な理論を概観している。その上で、本研究がCroft 2012のアスペクト体系を理論的基盤とすることを導き、特にCroftの提唱した時間（time）と質（quality）を両軸とするデカルト座標系によるアスペクトの表示法を詳しく紹介している。

第3章では、中国語の動量補語が単なる動作行為の回数を表示する以外に有する多様な文法機能として、特に事象アスペクトの非限界（atelic）性、動作主の感情や意志を表出する機能について考察している。

第4章では、已然義の副詞“已经”の用法を考察して、この時間副詞が完了相（perfect）副詞として事象の発生を「変化」として捉え、その変化後の状態を指す機能を持つことが諸用法の基底にあることを指摘している。

第5章では語構成のレベルに視野を転じ、擬音擬態語の形態とアスペクトの関係を検証している。重畳反復形式は全て擬音擬態語の有界形式であり、事象のアスペクト性の実現に関わっているが、単純基本形式は無界形式であるため、事象の時間性とは無関係であり、その結果として基本形式の多くが語形成成分や連体修飾語といった時間性とは関係のない位置に置かれることが明らかにされている。

第6章では、中国語動詞の語彙相プロトタイプを取り上げている。ここでは概念辞書から選んだ

735種の動詞と中国語の15種のアスペクト構文を対象に改めて分析を行い、動詞相のプロトタイプには、動作類、変化類、状態類という3つの主要類型と、動作-変化、動作-状態という2つの中間類型の、計5タイプがあることを証明している。

第7章では、本研究の成果をまとめ、今後の課題について述べている。本論文が扱った諸現象は中国語のアスペクトと関わる膨大な現象の中の極く一部のケーススタディでしかないため、今後は先ず共時的に現代中国語の言語事実の中で研究対象とする範囲を拡大する必要があること、更に通時的には中国語史的な視野からも体系的な検証を行う必要があることを述べている。

本論文は全編を通じて、流暢かつ洗練された現代中国語書面語によって記述されている。また、英語学や一般言語学から学んだ方法論を中国語の分析に適切に取り込み、スケールの大きな問題に対して果敢に取り組んだ労作であると評価できる。その主張には今後の検討や修正が必要な部分も残っているが、総じて明確な議論が展開されている好論文である。

以上のような点を総合的に判断し、論文審査担当者は全員一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を得るのにふさわしい研究論文であると判断した。